

中国人留学卒業生のキャリア形成

— 日本に留学した「二人っ子」と「一人っ子」の比較研究 —

Career Development of Chinese Graduates Who Studied in Japan

A Comparative Study of “Two Children” and “One Child”

博士後期課程 政治学専攻 2022 年度入学

閻 芳 氷

YAN Fangbing

【論文要旨】

本稿は、在日中国人留学卒業生のキャリア形成の実態、留学在学生の進路選択を、一人っ子と二人っ子の比較から考察するものである。一般的に、二人っ子より一人っ子のほうが親からの経済的な支援を継続的に受けやすいため、キャリアアップにとって有利である。他方で、長期的に見れば、二人っ子のほうはきょうだいがいるため、親の世話などの心配をせずに海外に居続けやすいと言えるかもしれない。実際、先行研究を見ると、「一人っ子のほうが帰国しやすい」「二人っ子のほうが将来帰国の意思が強い」という二種類の結論が提示されているが、両方の知見を統合するような視点が可能か否かを検討した。その結果、一人っ子より二人っ子の方が家族との結びつきが強く、将来帰国意思が強いことが本研究から確認することができた。キャリア形成には家族的要因が強く働いているため、家族に関わる情報をまとめることの重要性が示唆された。

【キーワード】 在日中国人、キャリア形成、進路選択、ライフストーリー、家族関係

1 はじめに

細井（2020）は、今の時代は3ヶ国語の語学能力が求められる時代であり、5年後、10年後には日本の職場には外国人が溢れ、外国人は次第に日本の一員になってゆくと予測する。しかし、実際の留学卒業生の雇用現状はそうに楽観的ではない。その原因の一つは留学生と企業の考え方の間にギャップが存在していることである（横須賀、2010）。企業の考え方は経済効果の有無によ

り企業の将来を判断するものが多いが、留学生の考え方はより複雑な要素に影響されていると考えられる。その中でも、特に仕事の将来性や家族に関することが最も目立っている（横須賀，2015；坪谷，2014；久野，2015；竇・佐藤，2017）。外国人にとって仕事キャリアと家族キャリアのバランスは常に国境を越える移動と深い関わりがある。親子関係、きょうだい構成・関係、家族の教育環境などのことをめぐって、戴二彪（2012）と馬文甜（2016）は異なる結論を示している。戴（2012）は一人っ子世代の帰国志向が高いと指摘したが、馬（2016）は一人っ子より非一人っ子の留学生のほうが将来的な帰国の意思が強いと指摘した。

本稿は、戴（2012）と馬（2016）の結論を検討し、一人っ子と二人っ子の比較から、在日中国人留学卒業生のキャリア形成の実態を考察する。そのうち、まだ就職しない留学生在生の場合には彼らの進路選択の傾向を検討する。そのためには、彼らの家族キャリア上のライフイベント、家族関係、留学後のライフストーリーおよび就職経験に注目する必要がある。すなわち、中国人留学卒業生の幼少時代から現在までの家族生活、留学生活、職場生活などは、彼らのキャリア形成にどのような影響を与えるのかということについて考察する。

本稿における「在日中国人留学生在生の進路選択」とは、彼らが進路を選択にした結果、日本へ滞在し続けるか、あるいは中国へ帰国するのかなど、国際移動を中心とした視点である。「留学卒業生のキャリア形成」とは、彼らの職業キャリアを中心に、家族キャリア、学校キャリアなどを含むライフコースである⁽¹⁾。

また、「一人っ子」という言葉には、広義の「かつてきょうだいがいたにもかかわらず、様々な要因によって現在きょうだいのいない子供のこと」という意味と⁽²⁾、狭義の「内的要因ないし外的要因によって、家庭に子供一人しか産まれず、その唯一の子供のこと」という意味がある⁽³⁾。今回の調査票では「一人っ子」という言葉が未定義のまま用いられており、その意味内容は基本的に調査対象者自身の感覚に委ねられている。いいかえれば、回答者が自身を「一人っ子」として認知している場合は、「一人っ子」として扱っている。

2 先行研究

2.1 家族と進路選択・キャリア形成の関係

女性の視点からキャリア形成と家族との関係を検討したのは浅井、鈴木、辺である。浅井（2004）は女性の職業キャリアと家族責任との関係を考察した。「女性の職業キャリアは、結婚、出産、育児、介護などの家族のイベントに大きく影響される」と指摘した。鈴木（2017）も日本企業で働いている外国人女性のキャリア形成に影響をもたらすものは、母国の家族から繰り返され

⁽¹⁾ 浅井由美，2004，「女性の職業キャリアと家族責任」『神戸海星女子学院大学研究紀要』，神戸海星女子学院大学研究委員会，43，p.1。「ある人のライフコースは、その人の家族キャリア，学校キャリア，職業キャリアなどのキャリアの束からなる。」

⁽²⁾ 楊春華，2018，『中国における「一人っ子」の家庭教育の特質—親の教育意識構造をめぐって—』，青山社，p.6.

⁽³⁾ 同上，p.6.

る結婚・出産に関する母国社会規範の圧力と指摘した。辺（2006）は中国の中年女性を研究対象としてキャリア研究を行なった。調査を通じて、国家政策は女性の働く場所の移動と関連することが確認された。国家政策以外に、定位家族と生殖家族の家族キャリア（結婚や出産、子育て、子供の教育、家族の介護など）上のライフイベントも女性のキャリアに大きな影響を及ぼすことを辺は指摘した。

また、中国国内の学生を対象としてキャリアと地域移動と家族との関係を研究したのは傅・陸、岳、範である。傅・陸（2020）は年齢によってキャリアを四つの段階に分ける。成長段階（4-13歳）、探索段階（14-24歳）、確定段階（25-45歳）、維持段階（46-65歳）および定年段階（65歳以降）である。傅・陸（2020）は上海と山東などの異なった地域の中学生における、一人っ子と非一人っ子との間でのキャリア価値観の差異を検討した。山東における一人っ子と非一人っ子学生のキャリア価値観には顕著な差異が見られないが、上海における一人っ子と非一人っ子には経済の安定性と社会地位に顕著な差異が見えるという結論が導き出されている。

岳（2011）は、中国の大卒者の就職に伴う地域移動の実態を考察した。彼は家族構成と家族背景（社会的と経済的）が大卒者の就職に伴う地域移動を引き起こす主要な原因であり、「男性」、「非一人っ子」、「よい学歴」といった特徴を持つ大卒者は流動性が高いということを指摘した。「父母在せば遠く遊ばず」（両親が存命の時は、遠くに旅をしない方がいい）という格言の影響により、一人っ子政策による一人っ子の急増もあって、大卒者の半数は地元で働く傾向がある。また、範（2017）は中国の小都市⁽⁴⁾出身の大卒者を対象に、家族が彼らの就職プロセスにもたらす影響を検討した。将来の老親扶養の可能性と家族・親族ネットワークの集中が、一人っ子大卒者の地元での就職を促す重要な要因となると指摘し、小都市出身の大卒者は就職先を選択する時、家族から大きな影響を受け、親の「安定志向」の要望が強いほど、大卒者の「体制内志向」の要望も強くなることを述べた⁽⁵⁾。

次いで、日本に留学した中国人学生に注目し、彼らの進路・キャリア選択に伴う国際移動を研究したのは王輝耀・苗緑、戴二彪、馬文甜である。

王・苗（2013）が2012年～2013年に中国人留学帰国者に対して行った調査票調査によると、60-70年代に生まれた留学生の中で「帰国後の就職への期待」という回答が帰国の理由としてトップなのに対し、80-90年代生まれの留学生の中では「両親と離れたくない」という理由がトップであった。家族や親子関係などの要素は「新世代」⁽⁶⁾の留学生の進路選択に大きな影響をもたらすこ

⁽⁴⁾ 中国の地方行政区画は、基本的に4層に分かれている。上から順に、1省級（直轄市・省・自治区・特別行政区）、2地級（副省級市を含む地級市など）、3県級（市轄区、県級市・県）、4郷級（街道・建制鎮・郷など）である。「都市」は、一般的に「直轄市」、「副省級市」を含む「地級市」、「県級市」といった「市」の付く行政区画を指す。ここの「小都市」は県級の都市を指している。

⁽⁵⁾ 範俏慧, 2017, 「中国小都市出身の大卒者の就職における家族の影響」『教育社会学研究』101:91-110. P.106.

⁽⁶⁾ 1980年～90年代以降に生まれた若い世代のこと、「80後」「90後」とも呼ぶ。

とが指摘された。

戴（2012）と馬（2016）はきょうだい構成に注目し、一人っ子と非一人っ子の帰国志向の差異を検討した。戴（2012）は、中国人留学生の帰国者数の急増に着目し、帰国した留学生の分布、規模、学歴・職業構成を考察した。両親の老後の介護のために帰国する留学生が増えているとし、一人っ子世代の帰国志向の高さを指摘する。馬（2016）は「現代日本における中国出身留学生の将来設計に関する一考察」において出身地の違い、配偶者・恋人の有無、一人っ子という属性が中国人留学生の進路選択に与える影響を考察した。出身地と配偶関係は顕著な影響が見られないに対して、きょうだい構成は進路選択に大きな影響を与える。一人っ子より非一人っ子の留学生のほうが将来帰国の意思が強いとも指摘した。また、馬（2016）は一人っ子と非一人っ子に分けて留学生の両親の意見を検討し、一人っ子の両親のほうは本人の意思に委ねており、一方で非一人っ子の両親のほうは子女の帰国を望んでいることを明らかにした。

以上の研究を通じ、定位家族と生殖家族の家族キャリア上のライフイベントは仕事キャリアと互いに影響を与えることが明らかになった。生殖家族の形成に伴う出産、育児、介護などのライフイベントは女性のキャリアに大きな影響をもたらす。それに対して、定位家族の親子関係、きょうだい構成や親の介護などは中国国内の大卒者・中国人留学生の地域・国際移動と深い関係がある。そのうち、きょうだい構成と帰国志向について、戴（2012）と馬（2016）は異なる結論を出した。なぜ一人っ子と非一人っ子にはそのような差異があるのかはまだ不明である。一人っ子と非一人っ子の相違点について、さらに研究する価値があると考えられる。次に、一人っ子家族をめぐる一人っ子と非一人っ子の比較研究を検討する。

2.2 一人っ子家族に関する研究

中国の一人っ子と一人っ子家族に関する研究において、風笑天は最も代表的な研究者である。風は、彼（2002）の研究において中国の一人っ子に関する研究を行った。1990年代前半では中国の一人っ子に関する研究は主に心理学と教育学の領域に集中しており、2000年代以降に社会学の分野に広がっていくことを指摘した。また、田・劉（2014）は彼らの研究において、一人っ子の研究課題が一人っ子のライフコースとともに広がり、幼児期の心理学研究から思春期以降の社会化研究までが中国の一人っ子研究の基本的な範囲であると指摘した。

【心理学と教育学研究】

楊（2018）は一人っ子と非一人っ子との親子関係および家庭教育における差異について考察した。一人っ子は非一人っ子より友達を求める傾向が強く、自分の気持ちが親に理解されていると感じていることが明らかになった。さらに、一人っ子と非一人っ子に対する親の教育意識に差異があることも検証の結果明らかになり、非一人っ子より一人っ子家族では子どもに対する教育期待が高いことが指摘されている。この差異をもたらす要因の背景には変動する社会情勢、親の職業または学歴という要素が存在し、一人っ子親と非一人っ子親との教育意識における差異は、単に「一人っ

子家族」ということに起因するとは言い切れないという結論が出されている。

また、メイ・フォン（2017）は過度に甘やかされた一人っ子世代（小皇帝）に注目し、彼らが「一人っ子政策」という特殊な状況下の時代に臨むプレッシャーと行動様式を考察した。「小皇帝」と呼ばれ、「四二一家庭」（夫婦の上には4人の親がいて、下には子ども1人という家庭構造）の下で過度に甘やかされて育った一人っ子世代は、わがままな子供だというイメージがある。中国の小皇帝たちは、自らを不運で強いプレッシャーにさらされていると感じ、このプレッシャーには家族からの重過ぎる愛、進学就職、および親孝行などが含まれていることがわかった。メイ・フォン（2017）は「両親老後の介護は一人っ子にとって最も関心を持たれる問題」と指摘した。

肖・風（2010）は「一人っ子と非一人っ子の性格は一般的に年齢が若いほど差異が大きく、年齢が高いほど差異が小さい」という傾向を指摘した。しかし、彼は社会に入った後の一人っ子と非一人っ子の間にはまだ差異があることも認めている。

【社会学研究】

杜・風（2006）は彼らの研究において、結婚相手への考え方、恋愛観、経済支出などを巡った、一人っ子と非一人っ子大学生の恋愛・結婚観や恋愛現状を考察した。非一人っ子より一人っ子大学生のほうが恋愛相手がいる割合が高いが、「早恋晩婚」という新たな恋愛・結婚観を持っている割合は一人っ子と非一人っ子の間に差異が見られないことがわかっている。また、風（2006）は中国の第一世代一人っ子の結婚後の居住方式および非一人っ子との差異を考察した。第一世代一人っ子の結婚後の居住方式は親との別居が主であり、全体の3分の2を占める。結婚後に親と同居するケースについては、夫婦双方が一人っ子の場合、夫方両親と同居する割合と妻方両親と同居する割合はほぼ同じである。夫婦のどちらか一方だけが一人っ子の場合、夫方の両親と同居する傾向が高く、夫婦が両方とも非一人っ子の場合、妻方の両親と同居する傾向にあることが明らかになった。

ここまで述べてきた先行研究は、進路選択、キャリア形成、一人っ子と非一人っ子の相違点を理解するうえで重要な知見を提供している。とはいえ、「一人っ子のほうが帰国しやすい」「非一人っ子のほうが将来帰国の意思が強い」という矛盾している二種類の結論が提示されている。一般論としては、非一人っ子より一人っ子のほうが親からの経済的な支援を継続的に受けやすいので、キャリアアップにとって有利である。一方で、長期的に見れば、非一人っ子のほうにはきょうだいがいるため、親の世話について心配することなく海外に居続けやすいかもしれない。そこで本稿では、先行研究で取り上げられたきょうだい構成に着目し、在日中国人留学卒業生のキャリア形成の実態（在学生の場合は進路選択の傾向）について検討を試みたい。

3 調査概要

本稿は、一人っ子と二人っ子の比較から、在日中国人留学卒業生のキャリア形成の実態を考察する。そのために、インタビュー調査で詳細を明らかにしている。ただし、インタビュー調査の内容を理解するためには、中国人留学卒業生の集団の特徴をある程度捉える必要がある。そのためウェブ調査を行う。しかし、中国人留学卒業生だけを調査対象者としては、量的調査としてはサンプルを十分に確保できない恐れがあるので、留学生在学生も含めてウェブ調査を行う。さらに、ウェブ調査票の末尾にインタビュー調査への協力可否を確認する質問を設置し、インタビューの協力者を募集する。

中国の調査用のソフトウェア「問巻網」を使用してウェブ調査用の電子版の調査票を作成した。2021年2月に知人を中心にスノーボールサンプリングを行い、SNSにこの調査票を公開し、また入国管理局と中華物産店で調査票のQRコードを配って回答者を募った。総計197人分の有効データを回収した（留学生145名、留学卒業生52名）。表1は回答者の属性と構成割合をまとめたものである。本稿では、きょうだいがいない人を「一人っ子」と表記し、二人と三人きょうだいを「非一人っ子」と表記する。ただし、三人きょうだいは少数のため、「非一人っ子」のほとんどは二人っ子であり、分析時には「非一人っ子」は「二人っ子」とであると解釈する。

回答者の基本属性を見ると、性別、出身地域、両親の学歴と職業について一人っ子と二人っ子の間には相違がある。二人っ子は、女性、中部・東部出身、両親の学歴が大学卒以下、両親の職業が自営業であるなどの属性の割合が高い。それに対して、一人っ子は、男性、東北部出身、両親の学歴が大学卒以上、両親の職業が公務員や民間企業勤務であるなどの属性の割合が相対的に高い。

今回の調査は機縁法で集めた少数のサンプルであるが、実際に一人っ子政策の第2子の出産条件との整合性があることがわかる。20年前の中国の農村部において男性は次代を支える重要な労働力と見なされた。そのため第一子が男の子ではないと、老後の生活が不安定になるため、第2子を持ちたいという気持ちが生じることがわかる。

また、調査票の末尾にインタビュー調査への協力可否を確認する質問を設置した。2021年4月から7月にかけて、「協力可」とした回答者のうち、追跡調査も可能な一人っ子と二人っ子それぞれ5人に対して、「留学の契機」「留学生活」「就活経緯」「現在の仕事」「家族の状況」「将来の計画」などの詳細を聞き取った。表2はインタビュー協力者のリストである。

表1 ウェブ調査回答者の属性⁽⁷⁾

性別	男性 33.5% (66名), 女性 66.0% (130名), その他 0.5% (1名)
生年	1982年-2002年 (19歳-39歳)
きょうだい構成 (本人が含まれる)	一人 79.2% (156名), 二人 18.3% (36名), 三人 2.5% (5名)
出身地	東北 24.9% (49名), 東部 41.6% (82名), 中部 14.7% (29名), 西部 18.3% (36名), マカオ特別行政区 0.5% (1名)
学歴	短大・高専・専門学校 9.6% (19名), 大学 46.7% (92名), 大学院・博士 41.1% (81名), その他 2.5% (5名)
職業	学生 73.6% (145名), 自営業 9.6% (19名), 民間企業 13.7% (27名), その他 3.0% (6名)
配偶関係	未婚・どちらでもない 55.8% (110名), 未婚・恋人がいる 38.6% (76名), 未婚・婚約者がいる 1% (2名), 既婚者 4.6% (9名)

表2 インタビュー協力者の基本属性

仮名	きょうだい構成	性別	生年	出身地	学歴	職業	配偶関係
ヨウ	一人っ子	女性	1984	上海市	博士	大学講師	未婚
リュウ	一人っ子	男性	1993	遼寧省	大学	調理師	未婚
ボウ	一人っ子	男性	1994	天津市	修士	コンビニ店長	未婚
チョウ	一人っ子	男性	1996	吉林省	大学	システムエンジニア	未婚
サイ	一人っ子	女性	1997	江蘇省	大学	事務職	未婚
ゼン	姉	女性	1992	河北省	専門 学校	事務職	未婚
シュウ	姉, 兄	女性	1993	内モン ゴル	専門 学校	コンビニ正社員	既婚
カユ	妹	男性	1994	福建省	修士	起業家	未婚
ドン	兄	女性	1995	遼寧省	修士	システムエンジニア	既婚
ギ	弟	女性	1996	天津市	大学	データ入力スタッフ	未婚

⁽⁷⁾ 『中国統計年鑑』の地域区分を基準にしている。東部：北京市, 天津市, 河北省, 山東省, 江蘇省, 上海市, 浙江省, 福建省, 広東省, 海南省。中部：山西省, 河南省, 安徽省, 湖北省, 湖南省, 江西省。西部：内モンゴル, 陝西省, 寧夏, 甘粛省, 青海省, 新疆, 四川省, 重慶市, 雲南省, 貴州省, 広西省, チベット。東北：黒竜江省, 吉林省, 遼寧省。

4 分析結果

4.1 ウェブ調査

まずはウェブ調査の結果から、留学の理由、自分の将来についての家族の考え方、家族からの干渉の程度、家族との連絡頻度、家族と話す内容、悩みについて話す頻度とその了解の程度などの全体的な傾向を留学生在学生と留学卒業生を合わせて分析する。

留学の理由、家族の干渉の程度、家族とのコミュニケーションの頻度とそれについての家族の理解程度は一人っ子と二人っ子の間で顕著な差異は見られない。多数の留学生は日本の文化に興味があるため日本へ留学し、家族から受ける干渉は少なく、家族と週1回以上の連絡をとり、家族からの理解を得ようとしていると思われる。

家族と悩みを話す程度および話す内容は、一人っ子と二人っ子の間で異なる傾向が見られた(表3)。二人っ子より一人っ子のほうが家族に悩みを話す傾向がある。また、一人っ子は家族に友人のことを話す傾向があり、二人っ子は家族のことについて話す傾向がある。これは両親の学歴・職業と深い関係があるのではないかと推察される。一人っ子の親は高学歴、公務員や民間企業の社員として働いている者が多い。それに対して、二人っ子の親は学歴に恵まれず、自営業を営む人が多い。学歴や仕事の影響で、一人っ子の両親のほうは自分の人生経験を組み合わせて、海外に滞在している子供たちに役立つアドバイスを提供することと考える。したがって、二人っ子より、一人っ子のほうは家族に悩みを話す傾向がある。しかし、カイ二乗独立検定を行ったところ、統計的に有意な差異が現れない($X^2=0.890$, $df=1$, $P=0.345$)。両者の傾向には違いがあると思われるが、仮にランダムサンプリングの場合で見れば、違いがあるとは言えない。

表3 悩みについて話す程度

	よく話す	時々話す	あまり話さない	まったく話さない	わからない	合計
一人っ子	37 23.7%	49 31.4%	48 30.8%	20 12.8%	2 1.3%	156 100.0%
二人っ子	7 17.1%	12 29.3%	18 43.9%	3 7.3%	1 2.4%	41 100.0%
合計	44 22.3%	61 31.0%	66 33.5%	23 11.7%	3 1.5%	197 100.0%

両親の意見については、一人っ子でも二人っ子でも、帰国を望んでいる割合が最も高い(表4)。そのような傾向の中で、日本滞在を望んでいる割合と本人の意見に委ねるという割合は一人っ子のほうが高い。逆に帰国を望んでいる割合は二人っ子のほうが高い。カイ二乗独立検定を行った結

果、一人っ子・二人っ子の間で両親の意見の違いについて統計的な関連は見られないが ($X^2=2.401$, $df=2$, $P=.301$), 性別に関連があることがわかった ($X^2=8.636$, $df=2$, $P=.013$)。中国には「女の子は一人で遠いところで生活しないで、両親のそばまたはきょうだいの近くで暮らしたほうがいい」という考え方がある。二人っ子の女性の割合は、一人っ子の女性の割合より高いため、二人っ子の両親の方が帰国を望んでいることが推測できる。また、一人っ子の両親は学歴が高いため、子供に直接に自分の考えを伝えることはせず、自分の考え方を胸にしまう形で子女の意思を尊敬する傾向があると考えられる。

表4 両親の意見

	帰国することを強く望んでいる	どちらかといえば帰国することを望んでいる	日本に残ることを強く望んでいる	どちらかといえば日本に残ることを望んでいる	あなたの意見に委ねる	わからない	合計
一人っ子	39 25.0%	32 20.5%	14 9.0%	11 7.1%	57 36.5%	3 1.9%	156 100.0%
二人っ子	11 26.8%	13 31.7%	2 4.9%	4 9.8%	8 19.5%	3 7.3%	41 100.0%
合計	50 25.4%	45 22.8%	16 8.1%	15 7.6%	65 33.0%	6 3.0%	197 100.0%

次に、回答者を留学生在学生と留学卒業生にわけて、それぞれに留学生在学生を対象にした将来の進路選択とその理由、留学卒業生を対象にした日本で就職する理由と具体的な勤続予定の年数とその理由を分析し、一人っ子と二人っ子の相違点を探す。

留学生在学生の進路選択については、異なる属性の対象者の間で顕著な差異は見られず、日本に残りたいという割合が最も高い(表5)。他方で、進路選択の理由は一人っ子と二人っ子の間で相違点が見られる。ただし、その理由を三つまで選んでくださいという複数回答の形にするため、検定を行わない。表6(集計の分母は表5で「日本に残る」と回答した者)・表7(集計の分母は表5で「日本に帰りたい」と回答した者)から見ると、故郷、或いは故郷に近い都市に就職ができるから中国に帰りたい、日本の賃金水準が高いから日本にとどまりたいという考え方は一人っ子と二人っ子とも同じである。一人っ子の中では、親孝行のために中国に帰りたいという回答と、日本で生活したほうが自由を楽しめるから日本にとどまりたいという回答で二人っ子より高い回答率が示された。一人っ子、二人っ子ともに帰国するかどうかは親と深い関係があるということが考えられる。二人っ子の場合、親との関係よりも就職の条件に基づいて帰国するかどうかを選択すると考えられる。留学卒業生でも同じ傾向が確認できる。また、二人っ子の中でも、そのうちの女性の日

本に残りたいという理由は異なっている。一般的に、二人っ子の留学生は中小都市の出身であり、卒業後同地域に帰郷してもできる仕事とそこで得られる賃金が理想と乖離している。あるいは海亀（留学経験者の意味）は大都市に行かないと「面子」を失うなど理由があり、日本の大都市で就職したいと考える傾向がある。さらに、女性は結婚のストレスを回避し、日本での自由な生活を楽しむため日本にとどまりたいと考えている。

表5 留学生の進路選択

	中国に帰国したい	日本に残る	第三国に行く	わからない	合計
一人っ子	40 35.7%	50 44.6%	3 2.7%	19 17.0%	112 100.0%
二人っ子	11 33.3%	16 48.5%	3 9.1%	3 9.1%	33 100.0%
合計	51 35.2%	66 45.5%	6 4.1%	22 15.2%	145 100.0%

表6 留学生の日本に留まりたい理由（複数回答）

項目	一人っ子(N)	%	二人っ子(N)	%
国に帰国しても故郷に帰れず、どうせ第三都市に行くなら日本にいたほうがいい	10	20.0%	8	50.0%
日本の賃金水準が高いから	17	34.0%	7	43.8%
日本の街や環境が衛生的だから	16	32.7%	1	6.3%
日本で勤務経験を積みたいから	17	34.0%	6	37.5%
永住資格を取得したいから	17	34.0%	6	37.5%
日本文化、日本社会が大好きだから	18	36.0%	5	31.3%
配偶者・恋人が日本にいる、或いは日本に残る意志が強いから	8	16.0%	2	12.5%
中国にきょうだいがいるので、帰らなくても親の介護に心配がない	0	0.0%	3	18.8%
家族が自分のことに頻繁干渉するから	7	14.0%	0	0.0%
日本で生活したほうが、自由を楽しめるから	17	34.0%	3	18.8%
せっかく日本に来たのに、事業が成功しないうちに中国に帰ったら面子を失うから	3	6.0%	1	6.3%
その他	1	2.0%	0	0.0%

表7 留学生の中国に帰りたい理由（複数回答）

項目	一人っ子(N)	%	二人っ子(N)	%
故郷、或いは故郷に近い都市に就職ができるから	22	55.0%	7	63.6%
就職を希望する都市に、親戚や友人がいるから	14	35.0%	2	18.2%
就職後実家から通うことができるため、 生活コストは日本に残る場合より低い	5	10.0%	0	0.0%
大都市の賃金水準は日本との差がそんなに 大きくないから	4	7.5%	0	0.0%
日本での勤務経験を中国に生かしたいから	3	32.5%	0	0.0%
親孝行のため	13	12.5%	4	26.4%
配偶者・恋人が中国にいるから、あるいは 帰る意思が強いから	5	7.5%	1	9.1%
日本でキャリアアップを図ることが難しいから	3	5.0%	1	9.1%
日本社会に上手く融け込むことが難しいから	2	37.5%	1	9.1%
中国で暮らしたほうが精神的に満足度が高いから	15	17.5%	4	36.4%
新型コロナウイルス(COVID-19)に感染することが 心配だから	7	17.5%	1	9.1%
その他	3	7.5%	0	0.0%

日本で働いている留学卒業生の勤続年数に関しては、データが少ないため、一人っ子と二人っ子の間で顕著な相違点がみられなかった。ただし、「日本で学業を終えた後、日本で数年間就職して一定の仕事のキャリアを積んでから帰国するというのが、大部分の中国人留学生の第1選択肢になっている」という報告がある⁽⁸⁾。確かに、今回の調査を見ても、勤続年数について、3年以内、5年程度を選択する人は多い。しかし、調査の結果では、一人っ子でも二人っ子でも「できるだけ長く」と回答した人数が最も多かったのである。次いで「分からない」の順となっている（一人っ子10人、二人っ子3人）。おそらく留学卒業生はもともと「キャリアを積んでから帰国」というような考え方を持ちながら日本で就職し、何年間か働いた後、「やはり日本のほうが昇進しやすい」「帰国しても何ができるか分からない」「中国の就職市場を理解しない」「日本の生活に慣れた、帰国したら中国の生活に慣れない」などの理由が持ちあがり帰国することに迷っているものと筆者は推測する。つまり、日本に滞在する時間が長いほど、帰国にかかるコストが上昇するということが指摘できる。このコストは、引っ越しや帰国の交通費など経済上のコストだけではなく、転職にともなうキャリアと人間関係の中断、新たな生活への適応などを引き起こすコストも含まれる。

今回の調査では留学卒業生においてとりわけ二人っ子の留学卒業生の人数が少ない。彼らの状況

⁽⁸⁾ 「在日中国人留学生の第1選択肢、『就職後に帰国』」人民網日本語版。(http://j.people.com.cn/n/2015/0119/c94473-8837592.html, 2021年9月17日閲覧)。

を確実に把握するため、次に留学卒業生を対象者としたインタビュー調査の内容を検討する。

4.2 インタビュー調査

本項では、一人っ子組と二人っ子組に対して実施したインタビュー調査の内容に基づき、中国人留学卒業生のキャリア選択とその形成のプロセスについて、留学の契機、留學生活、就活経緯、現在の仕事と家族の状況、将来の計画などの側面から考察する。

4.2.1 留学の契機

留学の理由について、協力者 10 人のうち、その半数は日本のポップカルチャーに興味があったため日本への留学を決めた（リュウ、チョウ、サイ、カユ、ギ）としている。それ以外では、日本の大学の教育と研究環境が魅力的であったため（ボウ、リュウ）や、友人、知人、家族などに勧められたため（サイ、ゼン、シュウ）とか、日本の企業に就職したいため（ヨウ）もしくは、母国で日本語を学んでいたため（ドン）などの理由も確認できた。

家族の留学への態度について、半数以上は賛成してくれた（リュウ、ボウ、チョウ、サイ、ゼン、シュウ、ドン、ギ）としている。そのうち、リュウ、ゼン、シュウさんの家族は留学に対して極めて積極的な態度を持っている。それ以外のヨウ、カユさんの家族は留学には反対であったとしている。二人とも家族の反対を振り切って、日本へ留学した。

留学前の状況について、ヨウさんとシュウさんはそれぞれ 2 年と 1 年という期間、中国で働いていた経験がある。しかし、ヨウさんは自発的に辞職し、日本への留学を計画した。シュウさんは仕事上の責任問題から退職を余儀なくされ、親戚からの誘いをもらい日本への留学を選択した。残った 8 人は学業を継続するために日本への留学を選択した。そのうち、リュウ、チョウ、サイ、ドン、ギさんは交換留学生というルートで日本へ留学した。ゼンさんは大学の留学生別科、ボウさんとカユさんは日本語学校を通じて日本への留学を実現した。中国人留学生が日本に留学する方法は多様であることが明らかになった。

留学の理由と留学前の状況について、一人っ子と二人っ子の間で顕著な差異は見られない。家族の留学への態度が賛成か反対かについては一人っ子と二人っ子の間で顕著な差異は見られないが、二人っ子の家族のほうを見てみると、他の親戚が日本に滞在している場合があるため、留学に対して極めて積極的な態度を持っているという傾向が確認できる。

4.2.2 留學生活

留學生活の具体的内容を見ると、在学中に早めに自立したい（ヨウ、リュウ、サイ）や、日本語能力を高めたい（ボウ、チョウ、カユ）および生活費を稼ぎたい（ボウ、ゼン、シュウ、ドン）などの理由で、協力者全員がアルバイトをしていた。従事していた仕事はほぼコンビニエンスストア、飲食店、工場などの業種に集中している。彼らのうちの半数は、アルバイトの経験がキャリア

形成に役立った（リュウ、ボウ、チョウ、シュウ）と述べている。そのうち、リュウ、ボウ、シュウさんはアルバイトの経験を通じて、将来は正社員として従事してみたい業種を見つけた。インタビュー時点でも同じ業種に従事している。チョウさんはコンビニエンスストアでのアルバイトを通じて、接客とサービス業の厳しさを認識し、就職活動の時にはサービス業を避けた。

学業とアルバイトが忙しいため、中国人留学生は学校の活動やサークルに参加する意欲が低い場合が多い。学校における日本人学生との付き合いが少なく、作った日本人の友達も少数である。インタビューにおいて、以下のような発言があった。

「日本人の友人はいたけれど、卒業後に連絡が途絶えた。」（ゼン）

「遊びに行くならやはり中国人の友達のほうを誘いたい。」（リュウ）

「日本人の考え方が分からない。」（サイ）

「アルバイトをしていた店では日本人との付き合いも多かったが、彼らはただ同僚であり、友達とは言いにくい。」（シュウ）

「日本人の友達が少ない。」（カユ）

「日本人の友達は少ないけど、中国人の友達ならたくさん出来た。」（ドン）

「日本人と話すことが怖い。」（ギ）

ここからは、言語の障壁などがあるため、中国人留学生にとって日本人の友達を作ることが難しいことが読みとれる。しかし、ヨウさんとリュウさんは来日してから既に10年以上の月日が経過しており、言語の障壁はほとんどなくなっているはずだが、それでも日本人より中国人との交流の方が深いとのことである。中国人同士の間では文化的背景や生活習慣が同じなため、長期間に渡って交友関係を維持することができる。中国人留学生のパーソナル・ネットワーク内の同質性が高いことがわかった。

ウェブ調査の分析では、一人っ子は友達に対する強い期待を持ち、その交友関係を家族に紹介したいという志向があることが確認できた。しかし、この期待は中国人の友達の場合に限定される。今回の協力者の回答から見ると、日本人の友達との交友関係および期待は、一人っ子と二人っ子の間で顕著な差異がなく、そちらも低いレベルにとどまっている。

また、一人っ子は日本語能力を高めるためにアルバイトをしているが、二人っ子は生活費と学費を稼ぐためにアルバイトをしている傾向がある。一人っ子より二人っ子のほうが、学業とアルバイトを両立させにくい傾向がある。これは戸籍および両親の職業と深い関係があると筆者は考えている。一人っ子は都市戸籍を持ち、親は公務員や民間企業で働いている傾向があるのに対して、二人っ子は農村戸籍を持ち、親は自営業を営んでいる傾向がある。一人っ子家族より、二人っ子家族のほうが相対的に経済力が低いことが多く、経済力の差異はアルバイトの動機の相違に影響を与えていると考えられる。

4.2.3 就活経緯

日本で就職したい理由については、「日本で働いて仕事の経験を積んだ後に帰国すれば、中国において仕事を探しやすい」（ボウ、ゼン、シュウ、ドン）という理由が最も顕著である。それ以外では、一人っ子の間で「日本で生活したほうが、自由を楽しめるため、日本に留まりたい」という考え方を持つ人も少なくない（ヨウ、サイ）。

就職活動をする時、ヨウ、ボウ、リュウさんは大手企業に関心を持っていた。個人能力や市場ニーズの影響で、彼らは就職活動をする時に理想と現実のギャップを体験した。サイ、ゼン、シュウ、カユ、ギさんは就職の成功率を高めるため、自身の専攻と関連する業種だけではなく、製造業、サービス業などといった外国人を積極的に採用する業種にも幅広くエントリーした。また、日本と中国では就職活動の内実が異なるため、多くの協力者のキャリア形成は自発的ではなく、受動的に形成された。例えば、サイさんとギさんは、ビザを更新するために不本意ながら派遣会社と不動産会社に就職した。ボウさんとドンさんは、就職する前はIT業界に関心がなく、内定も一件しかとれなかったため、「やってみよう」という気持ちで就職した。カユさんは元々日本で起業する意思はなく、日本での就職に失敗したことが契機になって起業した。

また、就活時の就職支援センターの利用状況について、「よく利用した」と答えたのはボウさんとチョウさんである。そのうち、チョウさんは「様々な会社の説明会の情報を教えてもらって、履歴書の修正、面接の練習などたくさんの支援指導を受けた。今でも感謝している」という高い評価を与えた。しかし、「就職支援センターの先生たちは留学生の状況を理解していないため、あまり利用しなかった」（サイ、ギ、ゼン、シュウ）という低い評価もある。教育機関における就職支援センターには留学生向けの情報と支援が少ないため、留学生に有用な就職支援を充実させるため、就職支援センターのシステムを改善する必要がある。それ以外では、「先輩・友人から就職支援をもらった」と話した協力者は4人いる（リュウ、シュウ、ドン、ギ）。中国人ネットワークは留学生のキャリア形成に重要な影響を与えていることがわかる。

就活経緯について、一人っ子と二人っ子の間で異なる傾向が見られた。まず日本で就職したい理由は、一人っ子の間では「日本で生活したほうが、自由を楽しめるため、日本に留まりたい」という理由が多く、二人っ子の間では「日本で働いて仕事の経験を積んだ後に帰国すれば、中国において仕事も探しやすい」という理由が多い。次に、二人っ子より一人っ子のほうが大都市、大手企業の志向が強く、就職活動をする時に高い理想を持っていた。個人能力と雇用市場のニーズの影響で、就職活動をする時に理想と現実のギャップを感じる傾向があることを確認した。

4.2.4 現在の仕事

協力者が従事している業種はサービス業、IT業界、事務職に集中しており、ヨウ、チョウ、ゼン、シュウ、ドンさんは「職場の雰囲気が良い」、「研修制度が充実していた」などの理由で、これらの職場環境に高評価を与えた。一方で、ギさんとボウさんはそれぞれ「職場の雰囲気が良くな

い]、「研修制度が不十分」などの理由から、低評価を与えた。ここから見ると、外国人は仕事に対する評価に関して、職場の雰囲気と研修制度を最も重視していることがわかる。

職場に関する悩みについては、「人間関係」と「残業」と答えた者が多かった。そのうち、ボウさんとリュウさんは「職場において外国人として差別された」と答えた。それに対して、ドン、チョウさんは「周りに中国人の同僚が多いため、差別されたことがない」と答え、カユ、サイ、ヨウさんは「中国語に関する仕事に従事しているため、差別されたことがない」と答えた。

また、リュウ、ボウ、サイ、ギさんには日本での転職経験があった。転職の理由について、インタビューにおいて、以下のような発言があった。

「異なった仕事を試み、経験を積みたい。」(リュウ)

「仕事は想像とは異なった。」(ボウ)

「仕事は自身のキャリアに役立たなかった。」(サイ)

「仕事は自身の性に合わなかった。」(ギ)

また、前の職場で学んだ経験があった、4人とも転職先でもうまくやっており、現在の仕事に高い評価を与えた。

「現在の仕事に満足する。」(リュウ)

「前の仕事より、充実している。」(ボウ)

「総体的に見て良い仕事だ。」(サイ)

「新しい仕事は私の性に合う。」(ギ)

転職によって、自身のキャリアへの期待を再確認し、仕事の価値観を見直すことができ、キャリア形成に役立つことが明らかとなった。また、日本人と比較し、外国人にとっては言語の障壁が存在するため、コミュニケーションへの悩みが多い。大手企業より、中小企業のほうが良い人間関係が作れ、上司・先輩の目が届きやすいなどのメリットがあることも分かった。

現在の仕事について、一人っ子と二人っ子の間で従事している業種に顕著な差異はないが、転職および転職計画には差異が見られる。今回の協力者に限れば、一人っ子のほうが転職する傾向があり、二人っ子のほうが安定した仕事を求める傾向がある。これは一人っ子と二人っ子の間では家庭環境によるキャリア価値観の差異があることに関係があると考えられる。二人っ子には地方出身者が多く、両親は自営業を営む傾向がある。そのため子どもの頃から仕事のやり方や生活場面、親の働き方・姿を見ており、仕事はどういうものなのかを知っていて、社会に対する適応度が高い。結果的に、安定した仕事を求め、転職する傾向が低い。一方、一人っ子は一般的に「四二一家族」で育てられ、家族から強く期待され、自然に高い理想を持つようになる。実際に就職したら、理想と現実の間にギャップを感じ、転職につながる傾向がある。

4.2.5 家族の状況

一人っ子と二人っ子の協力者の間で、親の学歴に顕著な差異は見られないが、職業には差異が見

られた。二人っ子の親は自営業に従事する傾向がある（ゼン、ドン、シュウ）。これはアンケート調査の結果と一致する。また、出身地域について顕著な差異は見られないが、二人っ子のほうが農村戸籍を持っている人が多く（ゼン、シュウ）、それに女性の人数も多い（ゼン、シュウ、ドン、ギ）。これは20年前の中国の一人っ子政策の第2子の出産条件と繋がると考えられる。

連絡頻度について、総体的に見ると、協力者のうちに二人っ子のほうは頻度が高い。しかし、「母親にしか連絡せず、父親とはあまり連絡しない」と話した人もいる（サイ、ギ、カユ）。これは父親の職業と深い関係があると推測する。3人の父親の職業は全部会社経営者であり、仕事が忙しいため、父親不在の問題を引き起こしやすいと考える。また、二人っ子はきょうだいとの連絡頻度も低い（シュウさん以外）。その理由について、インタビューにおいて以下のような発言があった。

「距離感があるため連絡は少なくなるが、悩みがある時に連絡する。」（ゼン）

「距離が遠いため用事がなければほとんど連絡しない。」（カユ）

「お兄さんと時差があるので、週末しか連絡しない。」（ドン）

「弟のことが嫌いなので、ほとんど連絡しない。」（ギ）

そこから見ると、距離はきょうだい間の交流頻度に重要な影響をもたらすことがわかる。また、シュウさん、ゼンさんとカユさんのケースから、きょうだい間の援助関係も見取取ることができ。この援助関係には、経済上の援助だけではなく、悩みの相談などの生活面の援助もある。

干渉程度について、ゼンさんとギさんは「よく干渉してくる」と回答した。これはウェブ調査の分析結果で言及した「一人っ子の両親のほうは自分の考え方を隠して子女の意思を尊敬する傾向がある」と一致する。中国には「報喜不報憂」（喜ばしい情報だけを知らせて不愉快にさせるような情報は伝えない）という伝統的な思想があり、家族に心配させないように協力者は普遍的に悩みや困ることを話さない傾向がある。しかし、ボウさんとサイさんは家族から役に立つアドバイスを受けることができるため、よく家族に悩み事を相談する。これも前節で言及した通り、親の職業と繋がると考える。

また、インタビューにおいて自由に発言する時、一人っ子のほうは自分に関する話題を話しており、二人っ子のほうは家族に関する話題を話していた傾向があることに気づいた。二人っ子の場合、家族成員が多いため、家族について話す話題が多いと想定できる。これもウェブ調査での「一人っ子のほうは自分のことに多く関心を持つ傾向があり、二人っ子のほうは家族のことに関心を持つ傾向がある」と一致する。

以上の分析により、性別、戸籍、両親の職業について一人っ子と二人っ子の実態は異なっていることがわかる。二人っ子の中には、女性、農村戸籍、両親の職業が自営業などの属性の割合が高い。それに対して、一人っ子の中では、男性、都市戸籍、両親の職業が国有企業、民間企業などの属性の割合が相対的に高い。この点はウェブ調査の結果と一致する。

しかし、家族からの干渉程度、家族とのコミュニケーションの頻度はアンケート調査の結果と異なり、一人っ子と二人っ子との間で異なる傾向が見られた。干渉程度と連絡頻度はどちらも、協力

者のうちの二人っ子のほうが高い。学歴が高い人ほど親子間のコミュニケーションが頻繁である⁽⁹⁾と言われるが、二人っ子における女性の割合は一人っ子の中の女性の割合より高いため、未婚の子に対して性別という要素のほうが強く働いていると考える。それ以外では、家族と悩みを話す程度はアンケート調査の結果と一致し、一人っ子のほうが家族に悩み事を相談する傾向がある。

4.2.6 将来の計画

協力者 10 人のうち、6 人（ヨウ、ボウ、チョウ、ゼン、カユ、ドン）は永住資格を取得したいと考えており、1 人（リュウ）は日本国籍を取得したいと考えている。永住資格と日本国籍を取得したい理由について、全員が「永住資格・日本国籍を申請して取得すれば、今後転職でも、起業でも、ビザの制限がなくなる」と答えた。ここから見ると、ビザの制限は外国人のキャリアアップに影響を与える。永住資格は外国人にとって魅力的である。

インタビューの時に、明確に「将来帰国する予定がある」と話した協力者が 2 人いる（シュウ、ギ）。シュウさんは「日本での生活が寂しい」、「家族のことを心配する」、「子供の将来の教育」などの理由を挙げ、自発的に帰国するとした。ギさんは「日本のほうは生活が自由だ」と考えて日本に留まりたがるが、母親からの干渉のために不本意ながら帰国するとした。また、明確に「将来日本に留まる」と話した協力者は 4 人いる（ヨウ、リュウ、カユ、ドン）。ヨウさんとカユさんは「日本で生活したほうが、自由を楽しめるから」、リュウさんは「日本社会が好きだから」、ドンさんは「子どもに日本の教育を受けさせたいから」などの理由を挙げた。家族の意見について、「自分の意見に委ねる」と回答した協力者は 5 人いる（ヨウ、ボウ、チョウ、サイ、ドン）。「帰国を望んでいる」と回答した協力者は 4 人いる（ゼン、シュウ、カユ、ギ）。これから見ると、ウェブ調査の分析結果で言及した「帰国を望んでいる割合は二人っ子のほうが高い」と同じ傾向がある。

現在心配することについて、「コロナの状況」が高い頻度で出現した。コロナは外国人の仕事だけではなく、国境の制限により国際移動が困難になり、母国における家族との付き合いにも悪い影響をもたらす。また、親の老後の介護を心配する協力者は 3 人（チョウ、サイ、シュウ）しかいない。中国の年金制度の改善と老人ホームの充実により、留学生、特に一人っ子留学生は親の老後の介護への不安が減少していることがわかる。彼らは日本での仕事を辞めて帰国することより、家族を日本に連れて来るほうを選択する傾向がある（リュウ、ボウ、チョウ）。中国人留学卒業生のキャリア形成は定位家族より、結婚相手、子育てなどを含む生殖家族のほうが緊密な関係があると考えている。

将来の計画を巡って協力者が自由に発言する時、「顺其自然」（自然の成り行きに任せること）、「船到橋頭自然直」（船が橋の下を通る時には自然に正面から通る）などの言葉が高い頻度で出現した。協力者は将来のことに楽観的であることがわかる。

以上の分析から、将来の計画について、一人っ子と二人っ子の間で相違点が見られる。一人っ子

⁽⁹⁾ 石原邦雄・青柳涼子・田淵六郎編、2013、『現代中国家族の多面性』弘文堂、p.92.

でも二人っ子でも、永住資格の取得に対する志向が高い。ビザの制限は中国人留学卒業生のキャリアアップに影響を与える。永住資格は彼らにとって魅力的であることがわかる。

一方、中国人留学卒業生の中で、一人っ子のほうが日本に定住したいと考えている傾向がある。二人っ子の中国人留学卒業生の中で、帰国するかどうかをめぐって二極化が出現した。農村戸籍を持っている二人っ子は都市戸籍を持っている二人っ子より、老親扶養と性別役割分業などの伝統的な家族意識が深く浸透しており、親孝行のために帰国する傾向があることがわかる。それにもかかわらず、農村戸籍でも都市戸籍でも、二人っ子のほうは中国にいる家族との結びつきをより重視する。この点は馬（2016）の結論と同じである。また、ウェブ調査による男女別留学生の進路選択の割合（男女いずれも「中国に帰りたい」は3割、「日本に残りたい」は4割）から見ると、帰国志向には性別差はほとんどないことがわかる。それ以外、親の介護について、一人っ子のほうは親を日本に連れて来るほうを選択する傾向がある。両親の意見は、本人の意見に委ねる割合は一人っ子のほうが高い。帰国を望んでいる割合は逆に二人っ子のほうが高い。この点はウェブ調査の結果と一致する。

5 考察と結論

本稿ではウェブ調査とインタビュー調査に基づいて一人っ子と非一人っ子の親子関係、国際移動、キャリア形成の差異性と共通性に着目しつつ考察して、以下の知見を導いた。

まず、中国人留学在学生の進路選択と卒業生のキャリアには、一人っ子と二人っ子の間で共通している点がある。それは、中国人留学生のパーソナル・ネットワーク内の同質性が高いことである。また、在学生の進路選択の理由について、故郷、或いは故郷に近い都市に就職ができるから中国に帰りたい、日本の賃金水準が高いから日本にとどまりたいという考え方は一人っ子と二人っ子とも同じである。大部分の留学卒業生のキャリア形成は自発ではなく、適用的に形成されたと言える。

一方、中国人留学在学生の進路選択について、統計的な有意差は見られないものの、サンプル数が少なく、割合から見ると、一人っ子でも二人っ子でも日本に残りたいという傾向がある。インタビュー 10 人の対象者に限り、日本で働いている中国人留学卒業生は二人っ子のほうが帰国する傾向がある。また、一人っ子のほうが転職する傾向（日本国内）があり、二人っ子のほうが安定した仕事を求める傾向があることが明らかとなった。

現在中国の 20 代、30 代の二人っ子は、中国の一人っ子政策時代下の特殊な存在と見なされている。一人っ子と二人っ子の間における行動様式上の差異に影響をもたらす要素は、家族成員の増加だけではなく、彼らの家族環境も強く働いていることが本稿の考察から浮かび上がってきたのである。具体的な知見は以下 4 点にまとめられる。そのうち、第 1、2 の知見はウェブ調査によって導いており、第 3、4 の知見はインタビュー調査によって導いていた。

第 1 に、性別、出身地域、両親の学歴と職業について一人っ子と二人っ子は異なっている。二人

っ子のうち、女性、中部・東部出身、両親の学歴が大学以下、両親の職業が自営業などの属性の割合が高い。一人っ子のうち、男性、東北部出身、両親の学歴が大学以上、両親の職業が公務員と民間企業などの属性の割合が相対的に高い。

第2に、統計的な有意差は見られないが、割合から見ると、一人っ子と二人っ子の間で性別分布および両親の学歴と職業の差異は、彼らの家族と悩みについて話す程度、家族からの干渉程度、家族とのコミュニケーションの頻度の差異に繋がる。一人っ子のほうは家族に悩みについて話す傾向がある。二人っ子のほうは家族の干渉程度と連絡頻度が高い。

第3に、中国人留学卒業生の中で、一人っ子のほうが日本に定住したいという傾向がある。二人っ子の中国人留学卒業生の中で、帰国するかどうかをめぐって二極化が出現した。農村戸籍を持っている二人っ子は都市戸籍を持っている二人っ子より、老親扶養と性別役割分業などの家族意識が強く浸透しており、親孝行のために帰国する傾向がある。また、両親の意見について、本人の意見に委ねる割合は一人っ子のほうが高い。逆に帰国を望んでいる割合は二人っ子のほうが高い。

第4に、二人っ子より一人っ子のほうが大都市、大手企業の志向が強く、就職活動をする時に高い理想を持っていた。また、一人っ子のほうが転職する傾向があり、二人っ子のほうが安定した仕事を求める傾向がある。

以上のように、本稿から一人っ子と二人っ子の家族環境、家族関係、考え方などについて共通点と相違点の一端を窺い知ることができた。新華僑と老華僑（それぞれ改革解放以前と以降に来日している中国人である）のアイデンティティの変容に関する研究は盛んである。本稿はきょうだい関係の有無に注目し、国際移動とキャリア形成への検討をすることによって、華僑社会への研究に新たな視野を提供することを期待する。また、日本政府の政策は2018年に「留学生30万人計画」を達成したことで、今後の注目点が留学生の受け入れから日本社会に定着させることに移ると考えられる。国際人材を活かして日本における労働力不足の問題を解決するために、留学生に就職支援を提供するだけでなく、彼らの進路選択・キャリア形成に重要な影響を与える家族のビザの審査手続きを簡易・効率化して、国境を超えて家族が容易に交流を続けられるよう、支援する必要があるだろう。一人っ子より二人っ子のほうが定位家族からの影響を受けやすく、老親扶養と性別役割分業などの家族意識が深く浸透されている。中国の二人っ子政策が実質化するにともない、国際人材の受け入れに関して、キャリア支援とともに、家族政策の重要性が増していくと推測できる。今回のデータは限られており、若い世代を注目するため、将来逆転する可能性がある。一人っ子の方が親から過干渉で育ってきたため、若いうちには帰国したくないが、結果的に一人しかいなくて帰国せざるをえないかもしれない。二人っ子は現在帰国したいと考えているが、もう少し日本に滞在し続けて結婚すると、むしろ日本に居やすくなる。そういうように統合される視点があり得るが、それは今後さらに検討を試みていきたい。

参考文献

- 浅井由美, 2004, 「女性の職業キャリアと家族責任」『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 神戸海星女子学院大学研究委員会, 43:1-8。
- 石原邦雄・青柳涼子・田淵六郎編, 2013, 『現代中国家族の多面性』弘文堂。
- 久野弓枝, 2015, 「中国人編入留学生のライフストーリー研究(2) —進路決定要因に着目して—」『文化と言語』83:41-52。
- 九門大士, 2020, 『日本を愛する外国人がなぜ日本企業で活躍できないのか』日経BP。
- 小浜正子, 2020, 『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版会。
- 近藤大介, 2018, 『未来の中国年表—超高齢大国でこれから起こること』講談社。
- 佐藤由利子, 2013, 「日本留学の利点とコスト—日米豪の私費留学生の学費, 生活費, 支援金等の経済要因の比較から—」『留学生教育』18:25-34。
- 白木三秀, 2007, 「日本における留学生雇用の現状と諸課題—多様な雇用管理が必要—」『世界の労働』57(10):42-48。
- 鈴木伸子, 2017, 「日本企業で働く女性外国人社員のジェンダーとキャリア形成—元留学生で文系総合職社員の場合—」『ジェンダー研究』20:55-71。
- 戴二彪, 2012, 『新移民と中国の経済発展—頭脳流出から頭脳循環へ—』(ICSEAD 研究叢書) 多賀出版。
- 張萍, 2008, 「中国における出生力低下の政策的要因: 人口高齢化の背景についての分析」『佛教大学社会学部論集』47:1-15。
- 坪谷美欧子, 2014, 「留学, 就労, 定住・再移動へのまなざしの変容—在日中国人の今後—」『なぜ今移民問題か』, 藤原書店, 20:264-271。
- 竇碩華・佐藤由利子, 2017, 「中国人元日本留学生の進路選択の影響要因と職場環境・生活環境に関する研究: 理工系と文系の比較, 主な職場別の分析から」『移民政策研究』移民政策学会編集委員会, 9:89-105。
- 範俏慧, 2017, 「中国小都市出身の大卒者の就職における家族の影響」『教育社会学研究』101:91-110。
- 馬文甜, 2016, 「現代日本における中国出身留学生の将来設計に関する一考察」『移民政策研究』8:71-88。
- 辺 静, 2006, 「中国中期女性の職業キャリアと家族キャリア—北京におけるインタビューからの一考察—」『人間文化論叢』9:377-387。
- 細井聡, 2020, 『同僚は外国人。10年後, ニッポンの職場はどう変わる!?』CCCメディアハウス。
- メイ・フォン, 2017, 『中国「絶望」家族: <一人っ子政策>は中国をどう変えたか』(小谷まさ代訳), 草思社。
- 楊春華, 2018, 『中国における「一人っ子」の家庭教育の特質—親の教育意識構造をめぐって—』青山社。
- 横須賀柳子, 2010, 「卒業留学生のキャリア支援をめぐる現状と課題」『留学交流』時評社, 22(10):2-5。
- 横須賀柳子, 2015, 「元留学生外国人社員の就業の現状と課題—2014年度調査中間報告を中心に—」『留学交流』48:8-21。
- 杜林・風笑天, 2006, 「婚恋観和恋愛現状—独生子女与非独生子女大学生的比較研究」『青年探索』2(12):35-37。
- 風笑天, 2002, 「中国独生子女研究: 回顧と前瞻」『江海学刊』2:90-99。
- 風笑天, 2006, 「第一代独生子女婚後居住方式: 一項12都市的調査分析」『人口研究』30(5):57-63。
- 傅曉林・陸素菊, 2020, 「独生子女与非独生子女職業価値観区域差異研究—以上海和山東兩地的中学生为例—」『職業教育(中旬刊)』19(17):3-7。
- 田丰・劉雨龍, 2014, 「高等教育对独生子女和非独生子女差異的影響分析」『人口与經濟』206:51-61。
- 王輝耀・苗緑, 2013, 『中国海帰発展報告』社会科学文献出版社。
- 肖富群・風笑天, 2010, 「我国独生子女研究30年: 兩種視角及其局限」『南京社会科学』7:45-52。
- 楊紅軍, 2020, 『当代日本留学生政策変遷』社会科学文献出版社。
- 岳昌君, 2011, 「大学生跨省流動的特点及影響因素分析」『復旦教育論壇』9(2):57-62。